

その授業でどんな力がついたら、子どもは自覚できていますか？

梶山女学園大学 教授 森 和久

一九五八年、愛知県生まれ。名古屋市内の公立小学校教諭、校長、教育委員会勤務を経て、現職。

インフォームド・コンセント

随分昔、病院内学級に勤めていたときのことです。「インフォームド・コンセント」が大切だということけれども、子どもには難しいのではないかと、小児科の医師に尋ねました。答えは、「子どもに分かるように行う必要がある」でした。この注射は何のために必要なのか、どんな役割の薬なのかなど、治療の意味を知り、納得していると、治療に対する前向きな気持ちが生じ、回復が違ってくるそうです。自覚的な目的意識は、まさに「生きる力」に直結するということを知らされました。

国語科における目的意識

では、国語科教育においては、目的意識はどのようなものか。国語科では、「学習者の目標」と「指導者の目標」とを別のものとして捉えることがあります。例えば、環境問題について扱った説明文の場合、子どもは、「環境問題の課題は何か」のように、教材の内容を追及しようとし、教師は、「要旨を捉える力をつける」のように、言葉の力を身につけさせようとしています。子どもの目標は「内容の追究」であり、教師の目標は「能力の育成」であるというように、異なる目標をもつことがあります。

こうした目標設定のしかたを、「教師の意図的な仕掛け」として肯定する考え方もあります。けれどもそれでは、先述のインフォームド・コンセントの例のような、子どもの自覚的な目的意識にはつながりにくいといえます。アクティブ・ラーニングを目ざし、能動的な学習を行ってはいても、例えば、「環境問題について考えよう」という話題や「壁新聞を作ろう」という活動のゴールが明確になっているだけで、その結果、どのような言葉の力がつくのか、子どもに明示されていない場合があります。つまり、何のためにその学習をするのかを、子どもが自覚できないのです。それでは、「どんな言葉の力がついたらのか」という観点での振り返りもできません。

指導目標を子どもに分かるように提示しよう

四月から授業を進めるにあたって、どんな言葉の力をつけるのかを、子どもに分かるように提示したいものです。その際の留意事項を三つ示します。

①具体的な目標にする

指導目標をそのまま示すと、大枠すぎて子どもに分からない場合が多いものです。そこで、その目標が達成されたときの具体例を子どもに示すといでしょう。例えば、「相手に分かりやすい表現の工夫」を目ざす場合、「相手がよく知っている例をあげる」「疑問形の見出しを付ける」などです。

②子どもから生まれた事柄を目標にする

例えば、学級内の子どもが書いた「どうして〇〇は△△なのか」という見出しを取り上げて、よい点について共通理解させます。そのうえで、みんなも「疑問形の見出しが付けられるようになる」というように目標を示すと、子どもにとって分かりやすいと思います。

③明確な評価規準を先に示しておく

先の例でいえば、どんな疑問形の見出しがよいのか子どもたちに考えさせます。例えば「話題の中心に合った疑問形になっているか」「身近な疑問でありながら意外性のある疑問になっているか」というように、明確な規準をあらかじめめとせるとよいでしょう。

自己評価させることが大事

子どもに分かりやすい目標は、振り返りもしやすいはず。国語科で身につけた力が、他教科や実生活の場で生かされているかどうかを子ども自身が自覚できるということは、非常に大切なことです。

そこで、国語の学習で学んだことをリストにして、それを実際に使うことができた印を付けるという、振り返りの場を定期的に設定してはどうでしょうか。

リストは、日々の授業の目標の中から、とりわけ汎用性が高いと思われるものを、蓄積していくといいと思います。すぐにできる方法としては、教科書に載っている「いつも気をつけよう」（「国語」二～六年冒頭）をリ

ストにするというものです。

教師はこのリストを日頃から意識しておき、その能力が発揮された場面で、「今、Aさんは、事実と自分の考えを区別して話すことができたね」「声の大きさに気をつけて話すことができたね」などのようにその都度評価し、それを自己評価するよう促します。リストは、子どもがすぐに取り出してチェックできるように、カードにして持たせておいたり、教室に掲示しておいたりするのもよいと思います。

今話題になっているアクティブ・ラーニングですが、表層的な活動にならないよう、どんな力を身につけるのか、子どもが自覚することが必要です。そして教師は、「この国語の学習を、社会のあの単元の前にやっておくと、国語で身につけた能力が使えるな」というように、扱う順序を工夫できればすばらしいと思います。

このように、教師と子どもがあらゆる場面で目標を意識するだけで、教え方や学び方の質が変わってくるのではないのでしょうか。